

独の名ヨット 友好の懸け橋

ドイツで設計された戦前の木造ヨットをめぐり、世界で数少ない同型船を持つ大津市の琵琶湖ヨット倶楽部（長谷川和之会長）と、オーストリア・ウィーンのヨットクラブが交流を始めている。欧州で入手が困難になった設計図を、同倶楽部が完全な形で保管していたためだ。ウィーンのクラブの求めに応じ、コピーを郵送した同倶楽部関

大津とウィーン クラブが交流

係者は「五輪に出た先人が取り持つ予想外の交流だ」と喜ぶ。

同倶楽部のシンボルでもある木造ヨット「アインハイツ・ツェナー」（E Z、全長六・六尺、幅一・四尺）は、一九三六年のベルリン五輪に出場した吉本善多氏（当時同志社大生、戦死）が次の五輪でのメダル獲得を目指してドイツから設計図を取り寄せ、三九年に大津市の造船所で建造された。

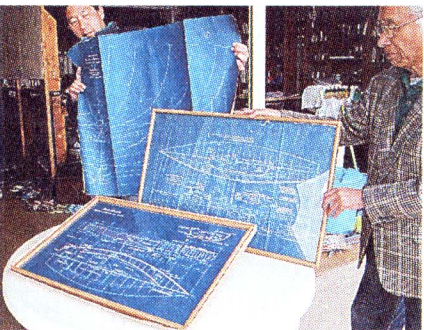
縁が保管、図設計の幻

昨年十一月、同型船を持つウィーンの「ユニオン・ヨットクラブ」の男性から「ホームページでE Zを見た。連絡を取りたい」とのメールが同倶楽部に届いた。第二次世界大戦の爆撃で同型船はドイツやオーストリアに六十艇しか残っていないこと、二〇〇五年から現存する同型船の所有者を探し、レイスを復活させていることなども記されていた。

しかし、「設計図だけは発見することができない」とあったため、同倶楽部の青木英明副会長（京都市伏見区）は早速、設計図をコピーし、ウィーンに郵送。クラブの男性からは、E Zの設計者はベルリンの天才的造船技術者だったことなどE Zの詳しい歴史をメールで教わったほか、同型船のカレンダーなども送られてきた。

E Zは現在、同倶楽部が主催する琵琶湖のヨットレースで年一回、その重厚で優美な姿を見せる。長谷川会長（京都市山科区）は「ベルリン五輪に出場した先人のおかげで、こうした交流が生まれた。改めてE Zを大事にしようと思う」と話し、青木副会長は「いざれウィーンを訪れ、復活したレースにも参加したい」と思い描いている。

琵琶湖ヨット倶楽部のシンボルとなっている木造ヨット「アインハイツ・ツェナー」



琵琶湖ヨット倶楽部が所有するE Zの設計図（大津市柳が崎・県立ヨットハーバー）